

神戸大学教職員組合への感謝の辞

浅野慎一(発達科学部支部)

今、ロシアがウクライナに侵攻し、戦争が起きています。

この戦争が、突発的な異常事態なのか、それとも私たちの日常生活・日常の社会の延長上でいけば必然的に起きた現象なのか。もちろん両方の側面があるでしょう。しかし、あえてどちらかと問われれば、私は今日の戦争は決して予測不可能な異常事態ではなく、現代社会が生み出した必然的な結果だと感じています。いつ、どこで、どのようなことをきっかけにして戦争が起きるか、それはわかりません。でも、いつか、どこかで、必ず戦争が起きるだろうということは、おそらく大多数の人々が感じていた、というより確信していたのではないのでしょうか。

つまり今回の戦争は、プーチンという悪辣な政治家が突然変異のように現れて起こしたものではありません。現代の平時の社会に、そして社会を構成する私たち一人ひとりの中に、つねにプーチンがいるということです。目の前に不正があっても「これは小さなことだ。もっと重要な大義がある」と誤魔化し、理不尽だとわかっているでも「どうしようもない」と言い訳をし、こんなことをしていたら日本の大学や学術研究がダメになると知りつつ、それを自ら毎日、こなしていかなければ、自分の役割・職務が果たせない。おそらくプーチンも立場上、やむにやまれず、退くに退けないのでしょう。

さて、私は神戸大学に来て30年間、組合にお世話になりました。その中で、ごくささやかではありますが、大学の研究・教育・労働条件の改善に貢献できたと思える部分も皆無ではありません。しかし貢献できたというより、組合からいただいた恩恵の方がはるかに大きかったというのが実感です。

組合からいただいた恩恵には、大きく二つあります。

一つは、客観的な研究・教育・労働条件の維持・改善です。組合がなければ、研究・教育・労働条件は今とは比較にならないほど劣悪なものになっていたのは間違いありません。時々、「組合があることのメリットが見えない」という人がいますが、それはその人が見ようとしていないか、あるいは見るために必要な最低限の社会的知識・洞察力を持ち合わせていないかのどちらかにすぎません。

二つ目の、もっと大きな恩恵は、前述の戦争の受けとめ方と関わります。私の中にプーチンがいて、目先の忙しさや社会全体の流れに押し流されてしまいがちになる。そんな時、自分に歯止めをかけて踏みとどまり、歩むべき道を考えさせてくれるのが組合であり、組合の仲間でした。また人間、世の中の大抵の事柄は「自分さえ我慢すれば済む」と思えば、やりすごすことができます。しかし、「これは自分だけの問題ではない」とか、目の前の困っている人のために「何とかしなければ」とか思った時、人間は初めて少しはまっとうな道に立

ち戻ることができるのだと思います。組合は私にとって、まさにそうした、まっとうな感覚へと導いてくれる「灯台」でした。これこそが、私が組合からいただいた最大の恩恵です。

実際、私は組合活動の中で、とてもよく笑いました。それは、今の大学における理不尽や、その歯車と化してストレスに苛まれている自分自身を、外側から客観的に見て、笑い飛ばす視点をいただいたということです。

一人ひとりの人間の日常生活でのささやかな葛藤やそれをバネにした発達、および戦争や平和の実現・大学改革をはじめとするマクロな社会の変動。この両者をつなぐ内在論理を解明し、真に人間のための世界を構築する多様な道筋を実証的に明らかにする「人間発達を基軸に据えた現代社会学」の構築。これは、21世紀の人類にとって極めて重要な課題であり、今後、多くの人々に様々な場面で必要とされる研究・実践課題だと思います。私は、神戸大学が発達科学部を廃止・改組してしまったことを、神戸大学のために惜しむものです。

神戸大学を退職後、私は大阪にある摂南大学からお声掛けをいただき、務めさせていただきましたこととなりました。引き続き「人間発達を基軸に据えた現代社会学」の教育・研究に微力を尽くしたいと思います。これこそが、組合から頂いた恩恵に、私なりにできるささやかな恩返しだと考えています。

神戸大学教職員組合の一層の発展を祈念して、お別れの言葉とさせていただきます。

長い間、本当にどうもありがとうございました。